マナビエ
MANABIE

記述の設計図　第3部 組み立てる

U05　問いを読む

問いを読む（聞かれていること・条件・傍線部の分解）

アドバンス

対象：高校2年・偏差値50

1. 要点（ルール）
2. 例題　評論「身体が先に知っている」
3. 練習1・練習2（解答らんつき）
4. 解答と採点表

要点　問いを読むのルール

R05-1　設問文を「問いの核」と「条件」に分ける

問いの核（何を答えるか）に直線、条件（語の指定・字数・「本文全体をふまえて」「具体例を用いずに」「～との違いがわかるように」など）に波線。設問は最後の「～せよ」まで読む。

R05-2　問いの核が型と文末を決める

「どういうことか」＝換言（～ということ。）／「なぜか」「なぜそう言えるのか」＝理由・意味内容（～から。）／「どのようなものか」＝説明（～もの。）／「違いを説明せよ」＝対比（Aは～だが、Bは～。）。

R05-3　条件は制約であり、要素でもある

「AとBの違いがわかるように」→Bの説明も要素になる。「～とはどのようなものかを明らかにして」→その定義が要素になる。「具体例を用いずに」→抽象化が必要。条件の数だけ、書いたあとに✓する。

R05-4　――線部をふくむ一文と、前後の接続語

一文の頭の「だとすれば」「つまり」「しかし」は、根拠の場所を教える。指示語は前を指すのが原則だが、前で見つからなければ後ろ（「次のような～」）も確かめる。

R05-5　分節し、本文中の定義で置きかえる

――線部を意味のまとまりで分け、各部分を本文の別の箇所（同じ語・類義語・定義・まとめ）で置きかえる。評論のキーワードは筆者独自の意味をもつことが多い＝辞書の意味ではなく本文中の定義を使う。

R05-6　省略を補う

主語・目的語に加え、比較の相手（何よりも？）・否定される側（何ではなく？）を補う。補ったものは、答えの要素になることが多い。

R05-7　構造語に注目する

「～ではなく」「～よりも先に」「～こそ」「～なのに」などの構造語は、答えが説明すべき部分を指す。対比なら両側、順序なら何と何の順序か、逆説ならなぜ矛盾しないのかを書く。

ルールの番号（R05-○）は、講座全体の通し番号です。動画・Webページ・このPDFで同じ番号を使っています。

例題　評論「身体が先に知っている」

① 自転車の乗り方を、ことばで説明してみてほしい。ハンドルをどの角度で切り、重心をどちらへ移し、ペダルをどれほどの強さで踏むのか。いざ説明しようとすると、私たちはほとんど何も言えないことに気づく。それでいて、私たちは毎日あたりまえのように自転車に乗っている。

② 私たちはふつう、何かを知っているとは、それを頭で知っていることだと考えている。頭で知るとは、ものごとを意識の前に置き、ことばに置きかえて説明できるようにすることである。学校の試験で問われるのも、多くはこの意味での知である。

③ しかし、説明できないのにできている、という知り方がたしかにある。熟練した大工は、木を削るときの刃の角度を、いちいち意識して決めているわけではない。木目にふれた手が、そのつど角度をととのえている。なぜその角度なのかと問われて、大工がうまく答えられないこともめずらしくない。

④ こうした場面では、身体は、意識がとらえるよりも前に、状況のわずかな変化を感じとり、それにふさわしい動きを選びとっている。意識は、すでに起きたその動きを、あとから追いかけてことばに置きかえているにすぎない。だとすれば、身体は、頭よりも先に知っているのだと言うべきだろう。

⑤ そのことは、身体の知を意識しようとしたときに、かえってはっきりする。ふだんの歩き方を意識したとたん、手と足の出し方がぎこちなくなる。ことばで確かめようとした瞬間に、身体がなめらかに知っていたことがくずれてしまうのである。

⑥ 他人と向きあうときも同じだ。相手の声がわずかにくもったとき、私たちは、それを「悲しそうだ」と判断するより先に、思わず自分の声を落としている。人と人とのあいだのこまやかな応答の多くは、意識の手前で、身体どうしが交わしているものなのだ。

⑦ 知を、ことばで説明できることだけに限ってしまえば、こうした身体の知は見えなくなる。わからないまま、できている。その事実の前に立ちどまるところから、知るということを考えなおしてみたい。

問　――線部「身体は、頭よりも先に知っている」とあるが、どういうことか。本文中の具体例を用いずに、「意識」という語を必ず用いて、八十字以内で説明せよ。

解き方

1. **手順1　問いの核と条件**
   問いの核「どういうことか」に直線＝換言、文末は「～ということ。」。条件は3つ。「本文中の具体例を用いずに」「『意識』という語を必ず用いて」「八十字以内」(R05-1～R05-3)。

2. **手順2　一文と接続語**
　——線部をふくむ一文は「だとすれば、身体は、頭よりも先に知っているのだと言うべきだろう」。「だとすれば」は前の内容を受ける＝根拠は④段落の前半（R05-4）。

3. **手順3　分節と構造語**
　「身体は／頭よりも先に／知っている」。「よりも先に」は順序の比較＝何が何よりも先なのかを書く（R05-7）。

4. **手順4　本文中の定義で置きかえる**
　「頭」は②段落で定義されている＝ものごとを意識の前に置き、ことばに置きかえて説明できるようにすること。「知っている」は辞書の意味ではなく、④段落の「状況のわずかな変化を感じとり、ふさわしい動きを選びとっている」（R05-5）。意識は「あとから追いかけている」も④段落。

5. **手順5　条件で点検**
　自転車・大工・歩き方・声を落とす、はすべて具体例＝書かない。「意識」が入ったか、八十字以内か、「～ということ。」で終わるかを✓する。

設問に2本の線

> ——線部「身体は、頭よりも先に知っている」とあるが、どういうことか。本文中の具体例を用いずに、「意識」という語を必ず用いて、八十字以内で説明せよ。

まっすぐな線＝聞かれていること（問いの核）／波線＝条件

分解表（設問と——線部を分ける）

分けた部分	本文での中身	根拠	答えに
問いの核	どういうことか → 換言。「～ということ。」	設問	◎ 文末
条件	具体例を用いない／「意識」を用いる／八十字以内	設問	◎ 書いたら✓
頭（同じ語を②で）	ものごとを意識し、ことばに置きかえて説明できるようにすること	②	◎ 入れる
よりも先に（構造語）	意識がとらえるより前に／意識はあとから追いかける	④	◎ 入れる
知っている（本文中の意味）	状況の変化を感じとり、ふさわしい動きを選びとっている	④	◎ 入れる
具体例	自転車・大工・歩き方・声を落とす	①③⑤⑥	× 条件で禁止

模範解答

模範解答（八十字以内）　80字／80字以内

身体は、ものごとを意識してことばで説明できるようになる前に、状況の変化を感じとってふさわしい動きを選びとっており、意識はそれをあとから追いかけているということ。

採点表

採点表(要素ごとの配点)	点
「知っている」の中身:状況の変化を感じとり、ふさわしい動きを選びとっている	4点
「頭」の中身:ものごとを意識し、ことばで説明できるようにすること	3点
「先に」の中身:意識より前に(意識はあとから追いかける)	2点
条件(具体例なし・「意識」・八十字以内)と文末「〜ということ。」	1点
合計	**10点**

減点の型(こう書くと)	何点になる？ なぜ？
「自転車の乗り方は説明できなくても、乗れるということ。」	具体例を用いている(条件違反)。一つの例にすぎず、「先に」の説明も無い。0点。
「身体は頭よりもすぐれているということ。」	「先に」を優劣と読みかえた。本文は順序の話であって優劣の話ではない。0点。
「意識」を用いていない答え	条件をはずした。条件の1点が入らない。採点の対象外にする学校もある。
「〜から。」で終える答え	問いの核は「どういうことか」。理由の形では、聞かれたことに答えていない。
八十一字以上	字数超過。採点対象外になることが多い。

練習1　評論「相手の身になる」

① 「相手の身になって考えなさい」と、私たちは子どものころからくり返し言われてきた。思いやりの基本として、この教えを疑う人は少ないだろう。だが、この教えは、実際にはどのように受けとられているのだろうか。

② 多くの人は、この教えを「もし自分が相手の立場に置かれたら、どう感じるかを想像すること」と理解している。友人が失敗して落ちこんでいれば、自分が同じ失敗をしたときのつらさを思いうかべ、なぐさめのことばを探す。

③ しかし、そこで想像されているのは、相手の立場に置かれた〈自分〉である。私が思いうかべているのは、私ならどう感じるかであって、相手がどう感じているかではない。人前で話すことを楽しめる人は、発表で声がふるえた友人に「次はだいじょうぶ」と軽く声をかけるかもしれない。だが、その友人にとって人前に立つことが、眠れなくなるほどの苦痛であったとしたらどうだろう。善意からのことばが、かえって相手を孤立させることもある。自分にとって軽いことが、相手にとっても軽いとはかぎらないのだ。

④ 自分の感じ方を相手に重ねて、相手をわかったつもりになること。それは、相手の身になることではなく、相手のいる場所を自分で占めてしまうことに近い。

⑤ 相手の身になるとは、相手になりかわることではない。それはむしろ、相手が自分とは異なる感じ方をする存在であることを認めたうえで、その違いを、相手のことばやふるまいから受けとろうとしつづけることである。

⑥ そのためには、わかったと思った瞬間にも、まだわかっていないものが残っていると考える慎重さが要る。相手のことばを自分の物語に回収せず、もう一度聴きなおす。思いやりとは、わかりあえなさを前提にしたうえで、それでも相手のほうへ身をかたむけつづけることなのではないか。

問　――線部「相手の身になるとは、相手になりかわることではない」とあるが、筆者の考える「相手の身になる」とはどういうことか。「相手になりかわる」こととの違いがわかるように、百字以内で説明せよ。

① 要素表を書こう

分けた部分(聞かれていること・条件・――線部)	中身	根拠の段落

② 答えを書こう

									10										20
									30										40
									50										60
									70										80
									90										100

100字以内(1マスに1字。句読点も1字)

練習2　評論(説明型)「問いを聴く」

① 何かを質問されると、私たちはすぐに答えを探しはじめる。正確な答えを、できるだけ早く返す。それがよい応答だと考えられているからだ。検索すれば一瞬で答えが出る時代には、その傾向はいっそう強まっている。答えにたどりつくまでの時間は、短ければ短いほどよいとされる。

② けれども、問いは、答えを書きこむためだけの空らんではない。だれかが何かを問うとき、そこには、その人がなぜそれを問わずにいられなかったのかという事情がふくまれている。病院で「この薬は効きますか」とたずねる人の問いの奥には、もし効かなかったらどうしようという不安がひそんでいるかもしれない。

③ 問いの文面だけに答える人は、正確な情報を返しながら、その不安には一度もふれないまま終わる。問うた人は、答えを受けとったのに、なぜか置き去りにされたように感じる。答えが正しいことと、問いに応えたことは、同じではないのだ。正しい答えが、かえって会話を終わらせてしまうことさえある。

④ 問いを聴くとは、文面の奥にある、問う人の事情に耳をすますことである。それは、相手がまだことばにしていないものを、むりにことばにさせることではない。答える前に、なぜこの人はいまこれを問うのかと、いったん立ちどまることだ。

⑤ 立ちどまって聴いてもらえたとき、問いそのものが変わることがある。「効きますか」とたずねた人が、話すうちに、ほんとうに聞きたかったのは「この病気とどうつきあっていけばよいか」だったと気づく。問いは、それを聴く人の前で、問う人自身にとっても、より深い問いへと育っていく。

⑥ だから、答えより先に、問いを聴かなければならない。すばやく正しく答える力が求められる時代だからこそ、問いの前で立ちどまる時間を、私たちは失ってはならないのである。

問　――線部「答えより先に、問いを聴かなければならない」とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。「問い」とはどのようなものかを明らかにしながら、本文全体をふまえて百二十字以内で説明せよ。

① 要素表を書こう

分けた部分(聞かれていること・条件・――線部)	中身	根拠の段落

② 答えを書こう

									10										20
									30										40
									50										60
									70										80
									90										100
									110										120

120字以内(1マスに1字。句読点も1字)

解答と採点表

練習1　評論「相手の身になる」

解き方

1. **手順1　問いの核と条件**
   問いの核は「筆者の考える『相手の身になる』とはどういうことか」＝換言。条件「『相手になりかわる』こととの違いがわかるように」は、なりかわることの説明も要素になるという意味（R05-3）。

2. **手順2　構造語**
   ――線部は「AではなくB」の否定の形（R05-7）。否定される側＝なりかわること、肯定される側＝相手の身になること。両側を書く。

3. **手順3　否定される側を本文で**
   「なりかわる」は③④段落＝相手の立場に置いた自分の感じ方を相手に重ね、わかったつもりになること（同じ内容を本文の別の語でさがす：R05-5）。

4. **手順4　肯定される側を本文で**
   ⑤段落「それはむしろ」以下＝相手が自分とは異なる感じ方をする存在だと認め、その違いを相手のことばやふるまいから受けとろうとしつづけること。⑥段落の「わかったと思っても、まだわかっていないものが残る」は「しつづける」を支える。

5. **手順5　組み立て**
   「Aではなく、B」の形で、Aに③④、Bに⑤⑥。具体例（発表で声がふるえた友人）は書かない。

設問に2本の線

――線部「相手の身になるとは、相手になりかわることではない」とあるが、筆者の考える「相手の身になる」とはどういうことか。「相手になりかわる」こととの違いがわかるように、百字以内で説明せよ。

まっすぐな線＝聞かれていること（問いの核）／波線＝条件

分解表(設問と――線部を分ける)

分けた部分	本文での中身	根拠	答えに
問いの核	筆者の考える「相手の身になる」とは → 換言	設問	◎ 文末「～こと。」
条件(中身)	「なりかわる」との違い → 否定される側も書く	設問	◎ 両側を書く
なりかわる(否定される側)	相手の立場に置いた自分の感じ方を相手に重ね、わかったつもりになる	③④	◎ 入れる
相手の身になる(中心)	相手が自分とは異なる感じ方をする存在だと認め、その違いを相手のことばやふるまいから受けとろうとする	⑤	◎ 入れる
しつづける	わかったと思っても、まだわかっていないものが残ると考える	⑥	○ 入れる
具体例	発表で声がふるえた友人	③	× 書かない

模範解答

模範解答(百字以内) 97字／100字以内

相手の立場に置いた自分の感じ方を相手に重ねてわかったつもりになるのではなく、相手が自分とは異なる感じ方をする存在だと認めたうえで、その違いを相手のことばやふるまいから受けとろうとしつづけること。

採点表

採点表(要素ごとの配点)	点
中心:異なる感じ方をする存在と認め、違いを相手のことばやふるまいから受けとろうとする	4点
否定される側:自分の感じ方を相手に重ね、わかったつもりになる(条件)	3点
「しつづける」:一度でわかったとせず、受けとろうとしつづける	2点
「AではなくB」の形で違いがわかる・文末「～こと。」・具体例なし	1点
合計	**10点**

減点の型(こう書くと)	何点になる？ なぜ？
「相手の立場に立って、どう感じるかを想像すること。」	筆者が否定している側(②の一般的な理解)を答えた。0点。
「相手の違いを受けとろうとすること。」(なりかわることの説明なし)	条件の「違いがわかるように」を満たしていない。3点が入らない。
「声がふるえた友人に軽く声をかけないこと。」	具体例のまま。0点。

練習2　評論(説明型)「問いを聴く」

解き方

1. **手順1　問いの核と条件**
   問いの核「なぜか」＝理由、文末は「～から。」(R05-2)。条件は3つ。「『問い』とはどのようなものかを明らかにしながら」＝問いの定義が要素になる。「本文全体をふまえて」＝一つの段落だけで答えない。「百二十字以内」。
2. **手順2　一文と接続語**
   ――線部の一文は「だから」で始まる＝理由は前の段落にある(R05-4)。②～⑤段落を順に見る。
3. **手順3　構造語**
   「答えより先に」＝順序。答えることより、問いを聴くことを先にする理由を書く(R05-7)。
4. **手順4　要素を本文全体から**
   ②段落:問いには、問う人がそれを問わずにいられなかった事情がふくまれる(＝問いとはどのようなものか)。③段落:文面だけに答えると、正確でも問う人を置き去りにする。⑤段落:立ちどまって聴けば、問いが問う人自身にとっても深い問いへ育つ。
5. **手順5　外すもの**
   薬の例は具体例(書かない)。①⑥段落の「すばやく答えることが求められる時代」は背景。百二十字でも、ほかの要素を先に入れる。

設問に2本の線

――線部「答えより先に、問いを聴かなければならない」とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。「問い」とはどのようなものかを明らかにしながら、本文全体をふまえて百二十字以内で説明せよ。

まっすぐな線＝聞かれていること(問いの核)／波線＝条件

分解表(設問と――線部を分ける)

分けた部分	本文での中身	根拠	答えに
問いの核	なぜか → 理由。「～から。」	設問	◎ 文末
条件1(中身)	「問い」とは:問う人がそれを問わずにいられなかった事情がふくまれたもの	②	◎ 入れる
文面だけに答えると	正確な情報を返しても、問う人を置き去りにする(応えたことにならない)	③	◎ 入れる
聴けば	問いが、問う人自身にとっても、より深い問いへと育つ	⑤	◎ 入れる
背景	すばやく正しく答えることが求められる時代	①⑥	△ 入れない
具体例	「この薬は効きますか」	②⑤	× 書かない

模範解答

模範解答(百二十字以内) 101字／120字以内

問いには、問う人がそれを問わずにいられなかった事情がふくまれており、文面だけに正確に答えても問う人を置き去りにしてしまうが、立ちどまって聴けば、問いは問う人自身にとってもより深い問いへと育っていくから。

採点表

採点表(要素ごとの配点)	点
問いとは:問う人がそれを問わずにいられなかった事情をふくむもの(条件)	4点
文面だけに答えると、正確でも問う人を置き去りにする	3点
聴けば、問いが問う人自身にとっても深い問いへ育つ	2点
文末「〜から。」・具体例なし	1点
合計	**10点**

減点の型(こう書くと)	何点になる？ なぜ？
「薬が効くかどうかより、不安を聞くべきだから。」	具体例のまま。問いの定義(条件)も無い。0点。
「すばやく正しく答える力が求められる時代だから。」	背景だけ。しかも筆者はその風潮に反対している。0点。
③段落だけで答える	「本文全体をふまえて」を満たしていない。問いの定義(4点)と⑤段落(2点)が入らない。

マナビエ
MANABIE

記述の設計図　U05 問いを読む（アドバンス）

© MANABIE　無断転載・複製・改変・再配布を禁じます